

南海蒼空戦記3

マリアナ奪回指令

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

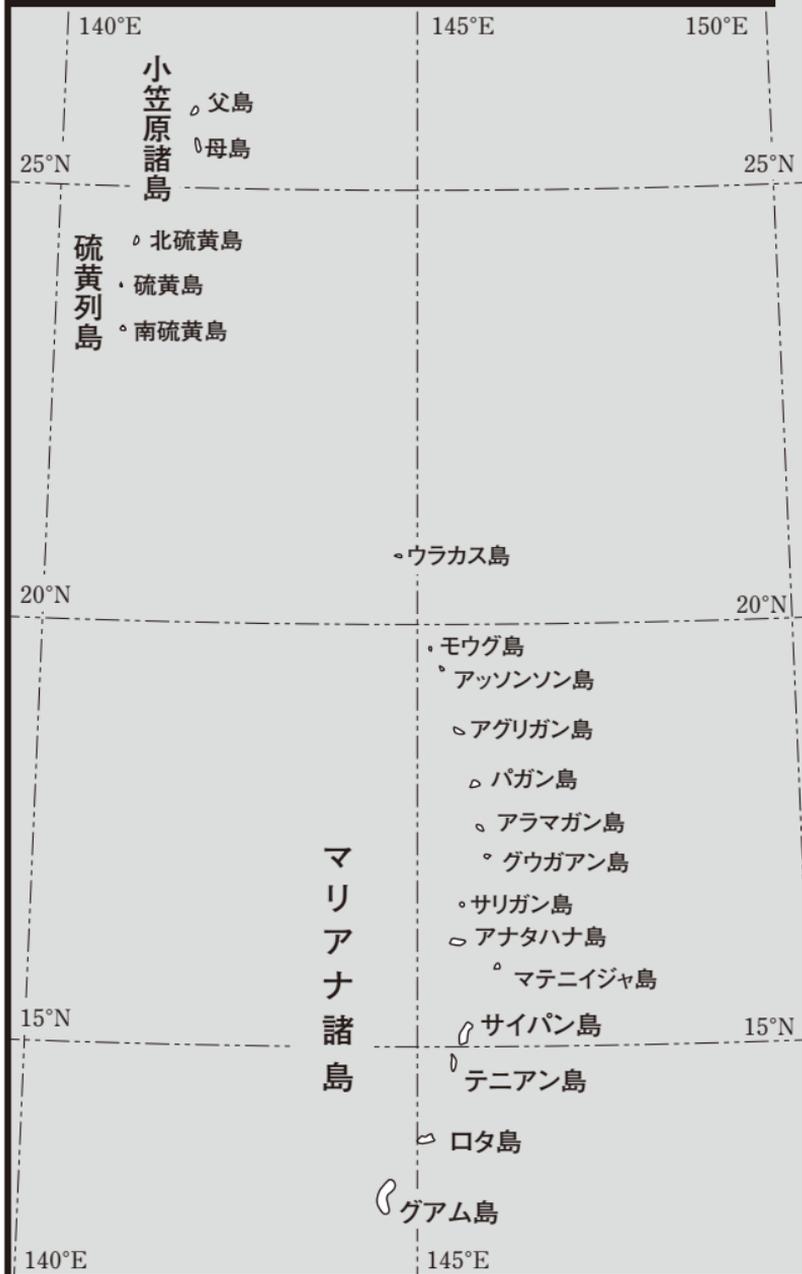
第一章	五九〇 ^{カイリ} 湮の攻防	9
第二章	天翔 ^{あまかけ} るアキレス	49
第三章	夜の守護者	83
第四章	訪れた戦機	119
第五章	機動部隊の標的	153
第六章	「極光」 ^{きょくこう} 初陣 ^{ういじん}	239



南西太平洋要図



小笠原諸島・マリアナ諸島詳細図



南海蒼空戦記 3

マリアナ奪回指令



第一章

五九〇

湮カイリの攻防

1

雲の切れ間から、多数の機影が出現した。

一組二〇機前後と思われる梯団四隊に分かれ、北に向かっている。

高度は、約四〇〇〇といったところだ。

機体形状は辛うじて分かる程度だが、機種名ははつきりしている。

ボーイング B 17 フライイング・フォートレス。

開戦以来、一貫して米重爆部隊の主力であり続けた四発機であろう。

「艦長より通信。各方面宛、打電せよ。『敵四発重爆ノ大編隊見ユ。位置、硫黄島ヨリノ方位一六

五度、二〇〇埋。敵針路三五五度。機数約八〇。〇

七二六』」

呂号第一〇五潜水艦長大場佐一大尉は、通信長山田誉中尉に命じた。

目は、B 17 群の動きを追う。

敵機からも、こちらの姿が見えているはずだ。

四発重爆の水平爆撃は、艦船には滅多に命中しないが、呂一〇五のような小型艦にとつては、至近弾

であっても致命傷になりかねない。

敵機がこちらに向かつて来る素振りを見せたら、直ちに潜航しなければならない。

最初の梯団が、呂一〇五の後方を通過して行く。

第二梯団、第三梯団がそれに続く。

呂一〇五など、目に入っていないような動きだ。

それでも大場は、B 17 の動きから目を離さない。

三七名の部下を預かると共に、硫黄島防衛の重責を担う立場だ。ここで沈められるようなことがあつてはならない。

「急速潜航」を即座に命じられるよう身構えながら、敵の動きを注視し続けた。

——幸い、呂一〇五に向かつて来る敵機はなかつた。

「敵が哨戒艦狩りを断念したというのは、本当だったようだな」

最後の梯団が通過したとき、大場は、司令塔に上がっている三名の見張員に笑いかけた。

マリアナ諸島が陥落した直後、日本海軍は、特設監視艇に、硫黄島南方海上の哨戒を担わせていた。

遠洋漁業用の底曳き網船や鰹漁船、鮪漁船等を乗組員ごと徴用したもので、総トン数は一隻当たり八〇トンから一五〇トン、乗員は漁船の乗組員と海軍軍人が半数ずつの一四名、艇長は予備中尉か兵曹長が務める。

兵装は七・七ミリ機銃一丁と小銃数丁。他に、敵潜水艦を発見した場合に備え、爆雷数発を搭載する。硫黄島とサイパン島の間海域に展開し、硫黄島に向かうB17編隊を見張るのだ。

報告を受けた硫黄島や、その北に位置する父島の飛行場からは、零戦や飛電、月光が発進し、硫黄島の手前でB17群を迎撃する。

監視艇は、防御力皆無の小船であり、敵に襲われたら確実に撃沈される。

沈められるまでの僅かな間に、敵情を可能な限り正確に把握し、かつ少しでも多くの情報を味方に知らせることが、軍民を合わせた監視艇の乗員に課せられた任務だった。

当初米軍は、監視艇には目もくれなかった。

硫黄島に向かうB17の搭乗員が、監視艇に気づかなかつたはずはないが、上空から見れば、あくまでただの漁船だ。

米兵は、マリアナ北部の島々に住む現地民の漁船だとも思っていたのかもしれない。

だが、米軍はやがて「漁船」の正体に気づいたのだろう、ロッキードP38「ライトニング」やコンソリデーテッドPB Y「カタリナ」が特設監視艇を攻撃して来るようになり、片端から爆撃や銃撃を浴びせて撃沈した。

このため海軍は、特設監視艇の使用を取り止め、

潜水艦に洋上見張りを担わせた。

呂一〇五号潜水艦も、その一隻だ。

離島の防衛を目的に建造された小型潜水艦の一隻で、全長六〇・九メートル、最大幅六メートル、水上排水量五二五トン、水中排水量七八二トンと、伊号潜水艦の乙型、丙型に比べ、四分の一以下の重量しか持たない。

一番艦の呂号第一〇〇潜水艦が竣工したのは、

昭和一七年九月二三日。蘭印を巡る日米間の緊張が日増しに高まり、開戦必至と噂されていた頃だ。

以後、一年足らずの間に一八隻が竣工している。

海軍は、これら一八隻の全てを、本土防衛の最前線である小笠原諸島の防衛に投入した。

この日——昭和一八年九月二二日、硫黄島の南方海上では、呂一〇五を含め、六隻が円弧状に展開し、上空に目を光らせている。

潜水艦の強みは、海中という逃げ道があることだ。敵機に見えられたら、無理な戦いを避け、急速潜

航をかけるのだ。

潜る前には、硫黄島の友軍に、「敵機発見」の一報を送ることを忘れない。

うまくすれば、味方の戦闘機が飛来し、敵の対潜機を叩き墜としてくれる。

事実、洋上監視任務を小型潜水艦に切り替えてから、硫黄島の戦闘機隊は、二〇機以上のカタリナを撃墜している。

B17が自ら小型潜水艦への攻撃を試みたことはあるが、水平爆撃の命中率は極めて低い。

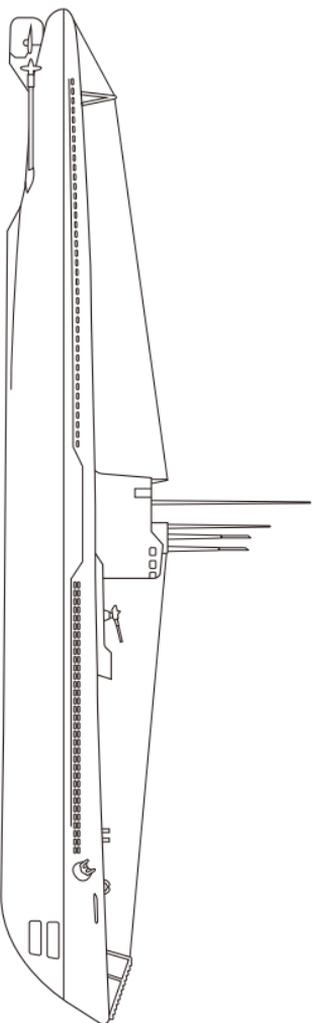
しかもB17が搭載している爆弾の多くは、着発信管付きの瞬発弾だ。

浮上航行中であればまだしも、一旦潜航してしまえば安全だ。

このため、潜水艦による洋上哨戒を開始して以来、喪失艦は一隻もない。

米軍は、哨戒艦に対する攻撃で、思いがけない損害を受けたことに驚いたのか、九月に入ってから、

日本海軍 呂号第105潜水艦



全長	60.9m
全備 基準排水量	6.0m
主機	525トン(水上)／782トン(水中)
出力	艦本式24号6型ディーゼル 2基／2軸
速力	1,000馬力(水上)／760馬力(水中)
兵装	14.2センチ(水上)／8.0センチ(水中)
	25mm 連装機銃 1基 2丁
	53cm 魚雷発射管 4門
乗員数	38名

日本海軍が離島防衛を目的に建造した小型潜水艦。これまで潜水艦隊の中心戦力として建造されてきた伊号潜水艦に比べ、基準排水量は四分の一程度の小型艦で、航続距離も搭載魚雷数も見劣りする。しかし、そのおん隠密性に優れ、当初の目的であった離島防衛のみならず洋上哨戒や敵地への偵察行動では大きな戦果を挙げつつある。

小型艦だけに建造期間も短く、昭和17年9月に一番艦の呂号第一〇〇潜水艦が竣工して以来、わずか一年たらずのあいだに18隻の同型艦が竣工している。

今後も、その小回りの良さを生かした活躍が期待される。

カタリナによる潜水艦狩りは影を潜めて^{ひそ}いる。

「米軍は、哨戒艦狩りを断念したのでは？」

というのが、洋上哨戒任務の指揮を執る^と第七潜水戦隊司令部の見解だ。

とはいえ、そのことについて、確証があるわけではなかった。

大場は、あらためて見張員たちに命じた。

「引き続き、見張りを怠^{おこ}るな。敵がどう出て来るかは、まだ分からんからな」

海軍第三三二航空隊の局地戦闘機「飛電」四八機は、硫黄島よりの方位一七五度、六〇埋地点で、北上して来るB17の編隊を待ち構えていた。

高度は、約八五〇メートル。

日米開戦時に配備されていた飛電一一型であれば、三菱「恒星」一一型エンジンが息をつき、辛うじて浮いていられる高度だ。

だが、三三二空に配備された四八機のエンジンは、快調な爆音を立てており、各中隊毎に緊密な編隊を組んでいた。

飛電より少し離れた空域には、第七〇五航空隊に所属する零式陸上攻撃機（零式陸攻）八機が展開している。

本来は、敵艦隊への雷撃や水平爆撃、敵飛行場や防御陣地への攻撃を主任務とする機体だが、この日の防空戦闘では、最も重要な役割を担うことになっていた。

「待つだけでも難行^{なんぎょうくぎよう}苦行^{くぎよう}だ」

三三二空の第三中隊長 榊郁太郎大尉は、正面の空を見据えて呟いた。

三三二空の装備機は、飛電二二型。

「恒星」一一型の改良型である「恒星」二二型を搭載した機体だ。

エンジンの基本性能は「恒星」一一型と同じだが、航空中央研究所（航空中研）が開発した排気タービ

ン過給機かきゅうきが取り付けられ、高高度における性能が向上している。

従来の「飛電」一一型は、戦闘可能な高度は六〇〇メートルあたりまでが限界とされて来たが、二二型は高度九〇〇メートルまで上がってもエンジン出力が若干低下する程度であり、充分戦えることが、試験飛行によって確認されている。

排気タービン過給機の搭載に伴い、機体は前後に延長され、重量も増した。

飛電一一型は、全長八・八メートル、全備重量三・七トンだったのに対し、二二型は全長九・三メートル、全備重量四トンとなった。

このため、最高速度は六二〇キロから六〇〇キロ丁度ちようどまで低下し、高度五〇〇〇までの到達時間は、四分五〇秒から五分一〇秒となった。

だが、高高度における飛行性能の確保は、それらの欠点を補おぎなって余りある。

陸軍は、海軍よりも一足早く、高高度での戦闘が

可能な三式戦闘機「飛燕ひえん」を配備したが、海軍もようやく高高度に対応した戦闘機を手に入れたのだ。ただし、搭乗員たちは厳しい戦いを強いられることとなった。

高高度では、気温が大幅に低下し、空気も薄くなる。

搭乗員はB17と戦う前に、極寒ごくかんや酸素不足に伴う思考力の低下と戦わねばならないのだ。

三三二空の飛電搭乗員と、七〇五空の陸攻搭乗員は、全員が電熱服を着込み、酸素マスクを着用しているが、これでも充分とは言えない。

電熱服は重く、かさばるため、ただでさえ狭い飛電のコックピットが、更に狭さく感じられる。小さな箱の中に、無理矢理押し込まれたような心地だ。

だが、高高度で戦える機体が他にない以上、止やむを得ない。

航空中央研究所では、飛電二二型以上に高高度での戦闘に適した新型局戦を開発しており、来年夏頃

までには実用化できるとの情報^が伝わっている。

それまでは、飛電二二型で凌^{しの}ぐ以外^にない。

——排気タービン過給機付きの恒星エンジンは、爆音^{とどろき}を轟^{とどろ}かせており、プロペラは高空の冷え切った大気をかき回している。

現在、外気温は零下^{れいか}三九度。亜熱帯圏とは思えぬ低温^だだ。

榊の故郷は長野^{ながの}県の安曇野^{あづみの}だが、厳寒期の日本アルプスでも、ここまで気温^が下がることは滅多^{にな}い。

電熱服を着込んでいても、寒さはひしひしと伝わって来る。

「来るなら早く来い」

空の彼方^{かなた}に向かって、榊は呼びかけた。

戦闘^がが始まってしまえば、他のことは気^{になら}なくなる。寒^{かろ}うが、暑^{かろ}うが、目の前の敵機^を墜^たすとすことに、全神経^が集中^{する}。

その時^が、一分^{でも}一秒^{でも}早く訪^れれることを、

榊は飛電^{あやつ}を操^{あやつ}りながら願^{ねが}っていた。

待つことしばし、

「来た！」

榊は小さな叫^{こゝろ}び声を漏^もらした。

蒼空^{そうくう}の彼方^に、多数^の黒点^{が見え}ている。

一つ一つが左右^にに広がり、航空機^の形^を整^{ととの}える。

哨戒^{せうがい}中の潜水艦^{から}通報^{があつた} B 17——「空^{そら}の要塞^{ようさい}」の編隊^に間違^いない。

梯団^{はいてん}は四隊^{。い}ずれも機体^{同士}の間隔^を詰^め、緊密^な編隊^{を作}っている。

旋回機銃座^{による}相互^{支援}を、行^いやすい隊形^だ。飛電^{一機}が攻撃^{できる}のは一機^{だけ}だが、敵^は複数^の機体^が同時^に銃火^を浴^びせて来る。

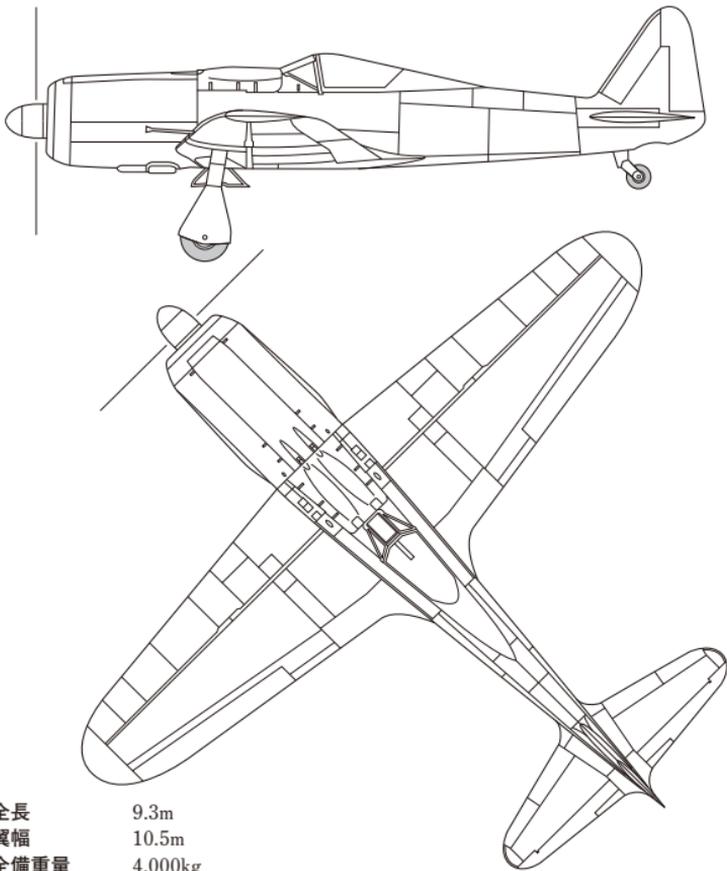
榊は巡航^{速度}を保^つたまま、次第^に接近^{して}来る

B 17の編隊^{を見据}えた。

飛電^隊より先に、陸攻^隊が動^{いた}。

旋回待機^{して}いる飛電^を尻目^{しりめ}に、敵編隊^{との}距離^を詰^{めて}行く。

日本海軍 二式局地戦闘機 飛電二二型



全長	9.3m
翼幅	10.5m
全備重量	4,000kg
発動機	三菱「恒星」二二型 1,700馬力
最大速度	600km/時
航続距離	1,073km
兵装	20mm 機関銃×4丁
乗員数	1名

主力戦闘機「飛電」の恒星発動機に排気タービン過給機を追加し、高高度性能を飛躍的に向上させたモデル。もともと「飛電」は対爆撃機邀撃用として開発され、上昇力と火力を重視した設計となっていたが、高高度域での運動性は不十分だった。

本型は機体重量が増加したことによる最大速度の低下など、いくつかの欠点は生じたものの、全般的な評価は高く、敵重爆撃隊への新たな戦力として重要な役割を担っている。

B 17群とは、五〇〇メートルほどの高度差がある。敵編隊の頭上を、反航する格好だ。

榊の目には、かなり危ない飛び方に見える。

零式陸攻にとつては、実用上昇限度ぎりぎりの飛行高度だ。

操縦桿の操作を僅かにしくじっただけで、高度は大幅に下がってしまう。

B 17群の近くで、そのようなことになれば、多数の敵機から銃火を浴びせられ、ひとたまりもなく墜とされる。

それでも、八機の陸攻は、姿勢を崩すことも、高度を下げることもなく、B 17群に接近した。

B 17側からの発砲はない。

下から上に機銃を放つても、弾丸の威力が減殺されるということもあるが、ただか八機の零式陸攻には、脅威を感じていないのだろう。

榊の目には、零式陸攻とB 17は互いに一発も撃ち合うことのないまますれ違ったように見えた。

直後、敵編隊の只中で異変が起きた。

巨大な火焰が湧き出し、無数の火の粉が飛び散ったのだ。

緊密に組まれていた編隊形が、一瞬で崩れた。

至近距離で爆発を受けたのか、機首を大きく破壊された機体や、片方の主翼が炎に包まれた機体が、真つ逆さまに墜ちてゆく。

距離を詰めていたことが災いし、爆風に大きく煽られ、僚機に衝突するB 17もある。

二機のB 17は、互いにもつれ合うようにしながら、雲の下に姿を消す。

エンジンに被弾したのか、黒煙を噴き出しながら高度を落とす機体や、操縦系統に損傷を受けたのか、大きくよろめく機体もある。

被弾を免れた機体も、元の隊形を保つことはできない。

梯団四隊のうち三隊が、四分五裂になっている。「高梨一番より全機へ。かかれ！」

この瞬間を待っていた——その感情を露わにした三三二空飛行隊長高梨勇少佐の命令が、無線電話機のレシーバーに響いた。

「三中隊、続け！」

榊は無線電話機のマイクに怒鳴ると、エンジン・スロットルをフルに開いた。

三菱「恒星」二二型エンジンの力強い咆哮と同時に、巡航速度で飛行していた機体が加速された。

榊の三中隊だけではない。

四八機の飛電が一斉に散開し、編隊形を崩されたB17に、思い思いの方向から突進する。

攻撃を開始したのは、飛電だけではない。

飛電隊よりも下方——高度六〇〇メートル前後の空域で旋回待機していた双発戦闘機「月光」の編隊も、高度を落としたB17に三七ミリ斜め銃の一撃を叩き込むべく、突撃を開始している。

「第一段階は成功だ」

飛電を操り、B17に突進しながら、榊は呟いた。

零式陸攻がB17編隊の頭上から投下したのは、三式航空爆弾。

対空・対地射撃用の三式弾を、航空機投下用に改造したものだ。長門型戦艦の四〇センチ砲弾を元にしたものと、伊勢型戦艦や金剛型戦艦の三六センチ砲弾を元にしたものの二種類がある。

零式陸攻が投下したのは、四〇センチ砲弾を元にしたもので、危害直径四六二メートルの範囲内に、焼夷榴散弾約七〇〇発、弾片約一三〇〇発を飛散させる。

小笠原諸島方面の航空作戦を担当する第一二航空艦隊は、緊密な編隊形を組むB17の頭上から三式航空爆弾を投下すれば、編隊をばらばらにできると睨んだのだ。

その狙いは図に当たった。

今の一撃で何機ものB17が墜落し、編隊も大きく崩れている。旋回機銃による相互支援など、到底望めない状態だ。

後は、ばらばらになったB17を片端から叩き墜とすだけだ。

榊はB17の第二梯団を目標に、第三中隊の飛電七機を誘導した。

村中修飛行兵曹長が率いる第二小隊が左に旋回し、榊が直率する第一小隊と分かれる。B17一機に對し、四機でかかる態勢だ。

一機のB17が、目の前に迫つて来た。

左主翼の二番エンジンから黒煙を引きずり、機首を前方に傾けている。

高度が下がれば、月光の大口径機銃の餌食になると分かっているのだろう、現高度を維持しようと必死のようだ。

B17の胴体上部に閃光が走った。

一二・七ミリ機銃の青白い火箭が、槍を突き出すように伸びて来た。

これは、榊の飛電を捉えることはない。敵弾は、榊機から大きく逸れている。

B17自体がエンジンに被弾し、ふらついている状態だ。足場が不安定な状態で機銃を撃つても、当たるものではない。

榊機の照準器が、B17を捉えた。

何基もの旋回機銃座を突き出した、ごつごつした機影が、白い環の中で膨れ上がった。

榊は、防寒用の分厚い手袋を通して、発射把柄を握った。

飛電の両翼に発射炎が閃き、四条の火箭が噴き延びた。

B17のコクピットから胴体上面にかけて、二〇ミリ弾が突き刺さった。火花と共に、黒い塵のような破片が飛び散った。

榊は速力を落とすことなく、急降下によって離脱する。

戦果を確認している余裕はない。一連射を浴びせたら、撃墜の有無に関わらず離脱するのが、局地戦闘機による空中戦の鉄則だ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。